

今回は鑑真(688年～763年)を中心に描こうと思う。

まず彼の生きた時代はどのような時代であったのか。それは晩年は別として唐の絶頂期であった。第6代の玄宗皇帝(685年～762年)の御世である。玄宗の時代の前半は、「開元の治」と呼ばれ国内は平和で安定し大いに繁栄した。しかし後半は政治に倦んで楊貴妃におぼれ国が乱れて行った。ともあれ平和で安定した世の中では文化、芸術などが花開くものである。

宗教界では、鑑真の評価は極めて高くいずれは中国仏教界の最高位につく人と見られていた。何も危険を侵してまで日本に渡航しなくても彼の将来は約束されていた。また玄宗も鑑真ら高僧の出国を禁止したほどである。

一方漢詩の世界を見るとこの時代にはスーパースターを輩出した。李白(701年～762年)、杜甫(712年～770年)を筆頭に枚挙にいとまがないほどである。この李白の詩に「揚州」という地名の入った著名な詩がある。親友であった孟浩然が黄鶴楼(武漢市)から揚州に向けて揚子江を下る光景を詠んだものである。

### 黄鶴楼送孟浩然之広陵

李白

故人西辞黄鶴楼  
烟花三月下揚州  
孤帆遠影碧空尽  
唯見長江天際流

(注：広陵は揚州を指す)

こうかくろう もうこうねん こうりょう ゆ おく  
黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

りはく  
李白

こじん にし こうかくろう し  
故人 西のかた 黄鶴楼を辞し  
えんか さんがつ ようしゅう くだ  
烟花 三月 揚州に下る  
こはん えんえい へきくう つ  
孤帆の遠影 碧空に尽き  
ただみ ちようこう てんさい なが  
唯だ見る 長江の天際に流るるを

以前、「わんりい」の漢詩の会でもこの詩がとりあげられ、植田渥雄先生の解説をお聞きした。孟浩然(689年～740年)は、「春眠不覚曉」から始まる「春曉」の作者であることはあまりにも有名である。

またこの時代李白や王維らと親交のあった阿倍仲麻呂(698年～770年)も忘れるわけにはいかない。秀才の誉れ高かった彼は717年(19歳)に第9次遣唐使船で留学した。その後科挙に合格し、玄宗皇帝に仕え高官に上り詰めた。日本人の留学生が当時の最難関試験の科挙試験に合格するのであるから如何に聡明であったかが分かる。ちなみに詩聖と呼ばれた杜甫は科挙に合格できなかった。仲麻呂は、753年(55歳)に帰国の途についたが暴風雨で南方に流されるなど、ついに日本の地を踏めなかったのはご承知の通りである。

ここで鑑真の生涯を概括しておこう。この高僧は688年に揚州で生を受けた。俗姓は「淳于」。14歳で出家し、勉強に励み修行を続けた。26歳の時に初めて律疏(疏は注釈の意)を講じた。46歳(733年)には「淮南(淮水の南)と江左(長江下流南岸)、浄く持戒する者はただ鑑真大和上独り秀でて倫なし」と比べる者はいないとの高評価を受けている。中国仏教界における鑑真の名声は天下に轟いて行ったのである。

733年と言えば、日本に戒律<sup>1)</sup>を授けることのできる高僧を招聘するという、重大な役目を仰せつかった「栄叡」と「普照」という僧侶を乗せた第10次遣唐使船が蘇州に到着した年である。栄叡と普照はその後与えられた役目を果たすべく、血のにじむような努力をした。この間の経緯は「天平の薨」(井上靖著)を読んでいただきたいが、ついに742年鑑真は大和朝廷からの伝戒の師としての招請を受け、渡日を決意したのである。実は、招請を受けたとき鑑真は僧侶を一堂に集め、この中に日本に渡って戒律を行うため希望者を募ったが誰一人として手を挙げる者はいなかった。当時は東シナ海を渡るのは死を覚

悟せざるを得なかったからである。その場の様子を見た鑑真は自分が行くことを決意したのである。戒壇を授けるのには10人の僧侶が必要だとのことであるが、自分たちの師匠が行くとなると、知らぬふりはできなかつたと見えて結局17人が随行することになった。鑑真がようやく6度目になんとか日本の地を踏めたのであるが、6度目も危うく失敗に終わるところであった。ここで、6度の苦難を簡単に書いてみたい。

#### 【第1回】

743年(鑑真55歳)、鑑真の渡航を嫌った弟子が、2人の日本僧は海賊であると密告し逮捕され、鑑真も渡航できなかった。

#### 【第2回】

743年、万全の準備を整えるも、暴風に遭い断念。

#### 【第3回】

744年(鑑真56歳)、鑑真と別れたくない僧により2人はまた密告され逮捕される

#### 【第4回】

744年、危険な旅に出ようとする鑑真を気遣った弟子が、勝手に渡航を中止させる。

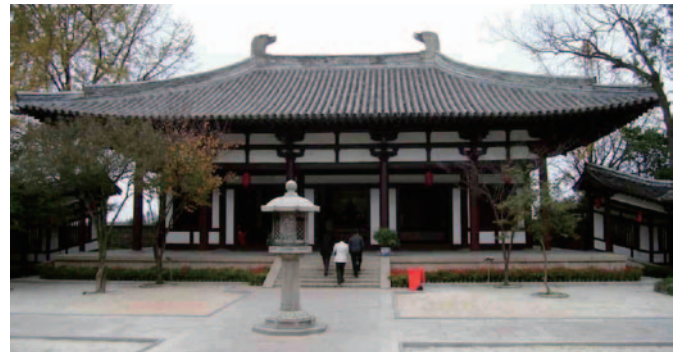
#### 【第5回】

748年(鑑真60歳)、暴風に遭い漂流、南の海南島に漂着。揚州に戻る途中で無理がたたって両目を失明。また揚州に戻る途中で体調を崩していた栄叡は死去。

#### 【第6回】

753年、(鑑真65歳)玄宗皇帝が渡航を禁止するも、鑑真や普照たちは遣唐使船に密かに乗り込む。またも暴風に遭い漂流しかけるが、沖縄に漂着し島伝いに九州に上陸。ついに来日に成功する。

これを見るとき当時の渡航が如何に大変であったことが明確にわかる。唐(玄宗皇帝)が渡航の禁止政策を打ち出した中、弟子の多くも鑑真を気遣ってあれこれ妨害をし、さらには何とか出航できても何度も暴風が行く手を遮った。そして5回目の時、上述のように失明までしたのだ。この時漂着した海南島から揚州に戻るのであるが、その距離はおそらく2000km以上はあったのではなかろうか。艱難辛苦もここに極まれり、と言うべき



揚州市大明寺に1973年建立された鑑真紀念堂

である。普通の人間であれば2度目で断念するであろう。この精神力の強さはいったいどこから来るのであろう。ただただ頭が下がる。

753年、鹿児島県に上陸後、鑑真は12月26日に普照と共に福

岡県の大宰府に入った。親友の栄叡を失うという悲運にもめげず、伝戒の師を無事日本の地に足を踏み入れさせた普照の感慨は如何ばかりであったであろう。

その後さらに旅をつづけ翌年の1月に平城京に到着した。鑑真は渡日成功の日から亡くなるまでの10年間の内、5年を東大寺、残りの5年を唐招提寺で過ごした。鑑真一行が奈良の都に着いてから、東大寺に戒壇を開き時の孝謙天皇をはじめ多くの人に日本ではじめて戒律を授けた。鑑真は日本における「律宗<sup>2)</sup>」の開祖であるが、759年、奈良の現在の地に律宗の道場として唐招提寺を建立した。その後ここを律宗の総本山として戒律研究に専念し、南都六宗の一つとして現在に至っている。

ところで鑑真といえば唐招提寺の坐像を思い浮かべる方が多いのではなかろうか。これは死去を惜しんだ弟子の忍基という僧が彫像を造ったものである。日本最古の肖像彫刻であり、国宝である。目は閉じられ穏やかな表情にみえる。五木寛之の「百寺巡礼」を



鑑真紀念堂(1973年建立)に祀られている鑑真和上の摸像(中国百度より)。1980年に唐招提寺の鑑真和上像が里帰りした折に摸して作られた。

読むと、彼はこの坐像を次のように書いている。〈失明した両目は閉じられている。ほのかに浮かんだ微笑みは、すでに死を覚悟している人のように見える。鑑真は結跏趺坐したままで息絶えたと言われ、この像はその姿を写したものだ、という説もある。故国を離れ、ついに戻ることがなかった鑑真。しかし、このお顔を拝見していると、日本へやってきたことを悔いたり、悲運を嘆くことはなかったと思える。非常に強い精神力の持ち主だったということが伝わってくる。すべてを超越したような心境で最期を迎えられたのだろう、という気がした〉。

この坐像が1980年に揚州市にある「大明寺」に里帰りをした。正確に言えば、もと大明寺があった跡地に戻ってきたのである。同寺は1500年を超える古刹で鑑真が住職をしていた鑑真ゆかりの寺として知られている。今では境内には「鑑真記念堂」が建てられている。実は大明寺は、1966年から始まった文化大革命で紅衛兵に徹底的に破壊され、僧侶は追放

された。まことにひどいことをするものである。その廃墟に、14年後の1980年、坐像が荒廃した大明寺に里帰りしたのである。大変なニュースとなり、一目見ようと訪れた人は21万人にも上ったそうである。これを機に100名の僧侶がこの寺に戻り、立派に再建されたという。

鑑真の偉大さがこのことでも分かるではないか。日中両国民にこれだけ愛され尊敬される人物は果たしてどれだけいるであろうか。彼が生きていたら今の日中関係をどのように思うであろう。 (つづく)

### 注釈

- 1) 戒律：僧侶が守るべき規則。「戒」は自己を制する誓い。「律」は集団が活動するときのルール。戒には罰則はないが、律には罰則がある。
- 2) 律宗：戒律の研究と実践を行う仏教の一宗派。中国では正式の僧となるには戒律を修めなければならない。日本でも戒律は伝えられていたが一部の寺院の研究に留まり、授戒の儀式も行われていなかった。



“鑑真和上渡海図・「鑑真和上と唐招提寺」より”